

韓国における日本語教育の現状

許 栄恩

A. 日本語教育の実態

1. 大学における日本語教育

1-1. 四年制大学における日本語教育

1) 概観

韓国における日本語教育は、1965年韓日国交正常化に先立ち、1961年に韓国外国語大学に日本語科が開設されたのがその始まりであります。その後国際大学（現在の西京大学）の夜間部に日本語科が設置され、1998年には四年制大学の場合総数187校のうち、日本関連学科は84校、102の学科に上り、短期大学は総数158のうち、67校、112の学科を数えています。

日本語関連学科の地域分布は、ソウル16、釜山8、大丘5、仁川2、光州5、大田6、京畿道8、江原道5、忠清南道6、忠清北道3、全羅南道4、全羅北道6、慶尚南道4、慶尚北道4、済州道1、になっています。これは日本語科が比較的全地域に分布されている事を示すものであります。

学科の名称を見ますと最初は日本語や日本文学中心だった学科名が最近では観光日本語や日本学のような実用的な学科が増えてきました。次の年度別日本関連学科設置の現況をあらわした表を見ますとそれがよく分かります。

<表1>

	日語日文	日本語	日本学	日語教育	日語日本	観光日語 通訳	観光日語	日本語情 報	合計
61-94	43	9	5	8	1				66
95	2	5	4						11
96	2	1			1				4
97	1	3	1						5
98	4	5	4			1	1	1	16
合計	52	23	14	8	2	1	1	1	102

2) 大学院

大学院は1993年には一般大学院が修士課程16、博士課程3、教育大学院が17校でありましたが、1998年には一般大学院の修士課程が18、博士課程が6で、教育大学院は18校になりました。その他に通訳大学院、国際大学院、地域大学院、亜太大学院といった特殊大学院が5つあります。

3) 学生と教員数、及び教科過程

1998年現在、日本に関連する専攻の学生数は15,908名で、教養日本語を受講する学生数は15万人と推定しています。そして教員数は専任が1993年には297人（専任講師56、助教授84、副教授104、教授53）、1998年には443人（専任講師117、助教授110、副教授93、教授93、その他30）で、非常勤講師の数は1993年の800名に対し、1998年には850名と推定されています。学生数に比べ専任の数が非常に

少ないのが問題と言えます。もう一つ特徴的なのは、全体の教員の職位の分布が、93年に比べ98年には専任教師と助教授といった若い層が増えていることです。これは1世代の日本語教師たちが日本統治時代に日本語を習っていた人たちであったのに対し、最近では日本に留学したりして正式に日本語を学んだ人たちが主流をなす事を示すものであります。

日本語関連学科の教科過程を見ますと、日語日文学科は「日本語学」「音韻論」「文語文法」のような専門的な科目から、次第に「時事日本語」「生活会話」「日本事情」といったような実用的な科目を多く取り入れています。教養課程では今までの日本語講読中心の教授法から脱皮して「日本の言語と文化」「日本の社会と文化」「韓日関係の理解」といった文化面を取り入れた講座が増えていて、学生たちの日本への関心も手伝って人気の高い科目として浮かび上がっています。

4) 学習目的と教育上の問題点

学生たちが日本語を学ぶ目的は、1. 日本文化（芸術、文学、言語、歴史、生活）についての知識習得、2. 資格を取るため、3. 日本の政治、経済、社会についての知識習得、4. 日本語を使ったコミュニケーション、のような理由の順になっています。そして教える側の問題点は1. 教材と教授法に関する情報の不足、2. 教師数の不足、3. 設備の不十分、4. 学習者の熱意不足、5. 日本語の教材、教授法についての情報不足、などが挙げられています。

1-2. 専門大学(短期大学)

1) 概観

韓国における専門大学は、1964年政府で技術力の養成を目的として「実業高等学校」を設立したのがその始まりであります。その後、初級大学と専門学校を一つにして「専門大学」が誕生しますが、1998年には教育部の施行令で専門大学も「大学」と改名させられ、今は四年制大学との区別がなくなりました。

現在韓国の専門大学の総数159の中で、純粋な日本語科を設けている大学は37、観光、経営、通訳、などの準専攻科を保有する大学は17であります。

2) 学生数と教員数、及び教科課程

専門大学の学生数は、純粋な日本語科の場合が3,800名ほどであり、準専攻科の学生が2,900名ほどになります。専任教員の数は148名（専任講師51、助教授52、副教授30、教授15）で、非常勤講師が189名になります。

教科課程は専門大学の場合は2年の間に実社会で通用する日本語を覚えられないといけませんので、かなり実用的な科目が中心となっています。たとえば「観光日本語会話」「ビジネス日本語」「日語通訳練習」「聞き取り」「貿易日本語」「ビジネス文書作成」といった類であり、特殊なものとしては鉄道専門大学の「接客日語会話」、航空運行科の「航空機内放送日語」などもあります。

3) 学習目的と教育上の問題点

専門大学の場合、学習者の日本語学習目的は四年制大学とは違い、就職が断然1位を占めています。

その次としては、日本文化について知りたい、社会で要求されているので、資格取得、日本語を使ったコミュニケーション、留学などの理由が挙げられています。

日本語を教える側の問題点としては、四年制大学とほぼ同じく、学習者の熱意不足、教材の不足、などが指摘されています。

2. 高校における日本語教育

1) 概観

1995年の日本語国際センターの調べによりますと、韓国の日本語学習者数は82万に上り、全世界の日本語学習者の50%を占めているそうです。このうちの68万あまりは高校で第二外国語として日本語を学ぶ人たちであります。この高校での日本語学習者たちはこれから続けて日本語を学ぶ可能性の高い重要な存在と言えます。実際大学の入試の時、学生達を面接して見ますと、高校で日本語を学んだのがきっかけで日本語科を志望した人がかなりの数になります。また、この高校での日本語学習予備群の存在と共に韓国での日本語教育において注目されるのは、2001年から中学校で日本語を含めた第二外国語が選択科目として入るといふことでもあります。

高校での日本語教育は1973年高校で日本語が第二外国語として教えられるようになり、さらに1975年には大学の入試科目と指定されて活気を帯びるようになります。1980年代には実業系高校の日本語学習者がほかの第二外国語より圧倒的に多くなり、1986年度にはドイツ語を抜いて1位を占めるようになります。次は第二外国語開設現況を表で示したものであります。

<表2>

	学級数		学習者数	
	1993年	1998年	1993年	1998年
一般系高校	24,362	23,005	1,169,305	1,114,220
ドイツ語	10,406	9,365	504,767	447,822
フランス語	5,965	5,381	288,373	269,648
中国語	885	1,614	42,312	78,384
日本語	6,886	6,294	324,750	301,076
スペイン語	220	351	9,103	17,290
実業系高校	12,171	10,675	569,667	495,687
ドイツ語	899	746	39,414	29,465
フランス語	624	438	28,363	19,516
中国語	395	357	19,140	15,424
日本語	10,225	9,116	481,487	430,340
スペイン語	28	18	1,263	942
合計	36,533	33,680	1,738,972	1,609,907

(教育統計年報、教育部)

この表で分かるように、一般高校の日本語学習者数、及び学級数は2位を占めていますが、実業高校の日本語学習者数が圧倒的に多く、全体的には日本語学習者数が1位となっています。

2) 学習目的と教育上の問題点

高校生が日本語を選択する理由は、日本文化についての知識習得、日本語によるコミュニケーション、国際理解、異文化理解のため、などに次いで、日本語自体への興味、就職のため、の順になっています。また教える側の問題点として指摘されたのは、学生たちの熱意の不足、日本文化や社会についての情報不足、適切な教材不足、日本語教材や、教授法についての情報の不足が挙げられています。

B. 学会の現況と課題

韓国で日本関連の最大級の学会は1977年に設立された「韓国日語日文学会」です。これは主に日本語学、文学を中心とした学会で、現在は400人余りの会員を有する学会となりました。この「韓国日語日文学会」に次ぐ二番目の学会としては「日本学会」があります。これは語学や文学だけでなく、日本の文化を中心とした日本学分野を中心とした学会であります。その他にも、大韓日語日文学科会、日本語文学科会、韓国日本語文学科会といった学会が結成され、最近活発な活動をしています。

これらの学会はすべてが日本語学、日本文学、日本学、日本語教育の分科を持っていますが、これからの課題はこれを各専門に分化していくことだと思います。そうすることによって学会が専門化し、発展していけるし、韓国の日本研究も今その段階に来ていると言えます。

C. 韓国における日本語教育の展望

古代においての日本と韓国の交流は密接な関係にあったと思います。日本書紀や続日本記などには「新羅訳語」とか「習新羅語」という記述が見え、日本で古くから新羅語を学んでいたことが分かります。しかし、韓国語が学問的関心の対象となったのは江戸時代の雨森芳洲からと言えます。芳洲は木下順庵のもとで儒学を勉強した後、対馬藩宗家に仕え、63年間にわたり儒学教授のほか、対朝鮮外交、貿易に従事しました。芳洲はまた、「全一道人」という韓国語の教科書をつくりました。その序文を見ると、当時対馬藩にとっては先進国であった新羅の言葉を習いたがらない人は一人も居ないという内容です。一方、韓国でも古くから日本語を学ぶ努力がありました。新羅では「倭典」をおき日本語教育と日本人接待に当たったといい、朝鮮時代には司訳院に倭学が置かれ、「捷解新語」という倭学の教科書が作られたりしました。昔はこのように韓国と日本がお互いの国を理解しようとして言葉を熱心に勉強しました。

今まで述べてきたように、韓国における日本語学習者の数は世界一です。これに比べ日本で韓国語を学習する人は非常に少ないです。言語は相互主義の上に立たないといけないと思います。韓国と日本でよく政治上の誤解が生じたりするのもこの相互主義の原則が守られていないからだだと思います。日本でももう少し隣の国の言葉を学ぶ努力が必要でないかと思います。

今度韓国の日本語教育の事情を見ますと、韓国では日本語に対する二面性をもっています。それは先進国としての日本に対する憧れを持って日本語に惹かれるのと、一方で日本への拒否感を持っていることです。こうした心の中での葛藤が日本を正確に理解することを妨げていると思います。この憧れと拒否感をいう両極端の距離を縮めるよう務めないといけないと思います。

もう一つの問題点は、韓国で日本語を学ぶ第一の理由があまりにも経済的なことに偏っているということです。韓国の大学は最近学部制の導入によって大きく揺れ動いています。日本語科の場合もカリキュ

ラムを日本学の方に大幅に修正しています。これは今までの語学中心の日本語教育から経済、歴史、文化を総合した日本理解を目指すという点で望ましい傾向だと思えます。日本と同じように韓国でも今日本学が注目を集めているということです。これから両国ともお互いに緊密なつながりを持った真の国際日本学を育てていくことを心から願いながら、本講演を締めくくりたいと思えます。

<参考文献>

『韓国の日本語教育の実態』韓国日語日文学会、1992. 2